



D O N C どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL 059-226-2766
FAX 059-229-0967

N° 65 juillet 2003 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

2003年度総会と「パリ祭」7月13日(日)に 高岡優希さんが記念講演とシャンソンも

三重日仏協会2003年度の総会と記念講演、「パリ祭」パーティーを下記のように開催します。ぜひご出席ください。総会の議事以外は一般の方の参加を歓迎します。お誘い合わせてどうぞ。なお会員各位には、この紙面をもちまして総会のご案内に代えさせていただきますのでご了承ください。

今回は四日市市在住、大阪大学などのフランス語の先生で、しかもchanteuse（歌手）であられる高岡優希さんに講演とシャンソン演奏を併せてお願いするという初めての試みです。ご期待ください。

記

◇日時 7月13日(日) 受付開始 PM 2:00

◇場所 プラザ洞津 近鉄津新町駅西 Tel 059-227-3291

- | | | |
|---------------|---------------------|--------------|
| ①総会 | | PM 2:30~3:00 |
| ②記念講演 | 演題『フランス革命と当時のシャンソン』 | PM 3:00~4:15 |
| | 高岡 優希氏 | |
| ③シャンソン・小コンサート | 高岡 優希氏 | PM 4:30~5:00 |
| ④『パリ祭』パーティー | | PM 5:00~6:30 |

会費 パーティー出席者 6,000円 *楽しい趣向を用意します*

*同封のハガキで出欠を7月3日までにご回答ください。

高岡 優希さん

1995年大阪大学大学院博士課程修了、言語文化学博士。現在、大阪大学、大阪外語大などでフランス語の非常勤講師を勤める。1997年から大阪日仏センター・アリアンスフランセーズで「歌うフランス語講座」を担当、シャンソンの楽しみを支えにフランス語を学ぶという主旨の講座を続けておられます。1996年には第12回日本アマチュアシャンソンコンクールで奨励賞受賞。

一緒に歌いましょう！（高岡さん）

〈フランス革命そのものについては、すでにどなたもよくご存知ですし、私などよりもっとその時代を語るにふさわしい方々がおられることと思います。ゆえに今回は、革命下のフランスでどんなシャンソンが歌われていたかをご紹介します。いくつかの歌をお聞きいただき、またフランス語の発音練習も兼ねて、ご一緒に口ずさんでまいりたいと思います。〉

モはや15年

ジャン＝フランソワ・ダメム

私たちが妻の実家に着いたのは午後8時ごろで、夕食の時間を1時間ほども過ぎていたのに、義父母は私たちを待っていてくれた。私たちはスーツケースやカバンやデッサン帳などなどの荷物を置いてから、食卓につくまでにざっと顔と手を洗ったのだが、茶の間から浴室に行くには二つの扉を通り過ぎなければならなかった。

フランスではふつう扉の高さは190センチかそれ以上だと思う。そこを通るときに格別の用心をする必要がない。

だから身長180センチの私もパリでは頭を低くしなくても動きまわることができたのだ。あいにく手を洗いに行くときにそんな反射神経をもたなかったのである。それで、食卓に着くまでに私は、行き帰り二度も鈍い音で頭をドアの鴨居にぶっつけてほとんど気絶状態であった。

それから私は箸を右手に初めての食事を始めたのだが、左手では頭のとっぺんをけんめいにさすっていたので、義父はそれを大いに笑った。

その晩、私は多くの犠牲を払って二つのたいへん大切なことを学んだのだった。まずケヤキ材がものすごく固い木材であるということ、もう一つは戸口を通るときには腰をかがめた方がいいということ、といってもケイリンのチャンピオンになるためではなく、頭に牛の角のような二つのコブをつけて食卓に現れずにすませるためである。でも不幸にしてその後の数カ月のうちに、私は何回もあの辛い経験をくり返さなければならなかったのだ。

妻の実家では、食事をするテーブルはこたつである。このすばらしい発明物は、冬のたいへん低い温度の部屋のなかでも、下半身をすっぽりと暖かく保つことができるし、また上半身が涼しいことが食欲を増進することにも気づいた。

しかし、こたつには長所もあるとしても、外国人にとっては一種の上等な拷問の道具でもある。ヨーロッパなどではテーブルで食事するときは快適な椅子に座って、少し背を丸くして…私は、半分座って半分寝たような、この体位にたいへん驚いた。

新参の外国人はこたつのなかでは、最初の10分間は気持ちよく過ぎるのだが、それからだんだんと足にアリがチクチクし（しびれ）始める。いっしょに食べている人たちへの礼儀から私はアグラの姿勢を保ち、食事は続く。それでも半時間後には足のアリがどんどん増え（しびれがひどくなり）つらくて少し動かなければどうにもならない。そのために私はトイレットに行きたいという口実をもうける。もちろん身をかがめてコブを作らないような注意は忘れずに。さらに最後の方策としてテーブルの下で足を伸ばすこともできるが、それはたちまち向かい側の人のヒザに足がふれることになる。

ということで、私は少なくとも何億匹ものアリを足に、頭のテッペンに二つの美しいコブを作っ



て、あの忘れられない食事を始めたのだった。

私が松阪にきたときひとつ大きな問題があった、それは仕事がないということだった。私はフランスでは財務省の公務員で、何週間かのちには庭師になり、また2年後に国立大学の教師になるなどと考えもしなかった。

私は義父の友人の庭師である阿部さんのところで働き始めた。私は彼が私の日本への理解や愛情を育てるのにたいへん役立ってくれたと心底思っている。阿部さんは実に親切で、信じられないほど忍耐づよい人で、そのちょっと皮肉っぽいまなざしのもとで私は知恵を授かったのである。

日本の庭は日本のイメージそのもので、長寿の象徴といえる。

彼はまた私に哲学を教えてくれた。といってもそれはリセでムリヤリ勉強する哲学でなく、手で植えて育てるような、またいつまでも長持ちする哲学であり、あなたが日本庭園に入ったときあなたの心臓の鼓動を停めるような、そんな哲学なのである。

どうしてこの1トンを超えるような大きな重い石が、暑い日ざしのなかでほとんど一日がかりで作業して、翌日にはほんの数センチだけ移動されているのか。

美しい文章で説明するのも、多く語るのも無益なこと、ただ両手で地面を触るだけで十分なのだ。

彼が私に伝えてくれたのは穏やかさのメッセージだった。ちょうど立ち木の下に座って、鯉たちが泳ぐのを眺め、林のなかの風の音を聞くことへの強いあこがれのような。

こんな風に生活は過ぎていき、平凡さのなかでいろいろの事柄がしばしば私の心から消えていく。でも阿部さんのおかげでそれらが私の記憶によみがえり、庭石や何百年も経た木々の間に座ってそれらの音やささやきに耳を澄ませるときには、私はもっとも幸せな人間だと感じるようになる。

阿部さんは私にとっては一人の友人である以上に哲学者なのだ。彼は木々を植えるとともに人生を植えた、そんな人である。

私はこの期間にすばらしい思い出を持ち続けている。この文章を書いている男が、かなり以前に中部台公園で芝生を刈る仕事をしていたことを知ったら、多くの人たちが驚くだろうと思う。

まったく昔のことだ…息子を幼稚園に連れていった日々ははるか遠い。彼はいまや17歳、背丈が185センチもあって来年は大学にすすむ年だ。そして私は…

おなかが少しふくらんできた!!!

これが人生というものだ!

Jean-François DAMÊME

文中にあるように元フランス財務省勤務。パリで活躍していた画家・中島世津子さん（松阪市出身）と知り合い結婚、1988年から松阪市に居を移した。それ以来一貫して三重日仏協会の活動に協力され、恒例のフランス語入門講座の講師も今年で14回目となった。三重日仏協会理事、三重大学講師。

原稿はフランス語でいただき編集部で訳しました。紙面の都合で原文は掲載できませんが、ご希望の方にはコピーをさしあげますので、事務局までご連絡下さい。

7/1(火)~17(木)

三重日仏協会、〈ラ・パルム・ドール〉共催

プロヴァンスの画集

…料理と絵画のマリアージュ…

おなじみのアルランディスらプロヴァンスの画家たち3人の作品を津市の有名レストラン〈ラ・パルム・ドール〉のサロンに展示し、後藤シェフが特にプロヴァンスをイメージして腕をふるう特別メニューを提供、まさに美味しい料理と美しい美術作品のマリアージュ(結婚)を楽しんでいただける企画です。

場所 フランス料理レストラン〈ラ・パルム・ドール〉

津市一身田大古曾1325-1 ☎059-232-8500

期間中特別メニュー：昼食3,000円 夕食6,000円

出展者 アルランディス、マリー＝ノエル・デレトワル、ヴィクトル・バッシ

なお展示品は販売され、売上げの一部を日仏民間交流の資金として活用させていただきます。

今年も四日市に企業研修生 近鉄百貨店にマリー・フレストーさん

「日本の文化や言葉に接しながら、日本の経済、政治、行政などを学び、日本市場へのアプローチに役立てる」という目的で、今年もフランスはリヨン第2大学経済学部大学院生のMarie BRÊTEAU (24歳・トゥールーズ出身)さんが来日、四日市の家庭にホームステイしながら近鉄百貨店で研修を続けています。

〈日本とフランスの文化やデパートの仕組みの違いが勉強できて、とても充実した生活を送っています。映画と演劇が好きで、日本の映画や文化に興味をもったので来てみたいと思っていました。いままでに小津、黒澤、北野、宮崎監督などの作品をよく見ました。7月末まで、日本のことをたくさん勉強していきたいので、皆さんよろしくお願いします。〉



新刊紹介

三重日仏協会におなじみの二人の先生がかかわられた本が相次いで出版されましたのでご紹介します。ぜひご購入ください。

20世紀フランス思想を読む 渡辺 諒著 白水社 2,400円

(渡辺諒は三重大学から横浜市立大学に移られた渡辺芳敬先生のペムンネームです)

バルザックとこだわりフランス…ちょっといい旅… 柏木隆雄編 恒星出版 1,600円

またほかに、都市の傑作パリの「かたち」を知る本 ぶらぶら猫のパリ散歩

文・絵 藤野優哉著 新宿書房 2,500円

(出版社から美しいチラシが届いています。ご希望の方は事務局まで)

読書会

次のテキストはMarcel PAGNOL 〈SOUVENIR D' ENFANCE〉

毎月第1木曜日に会員有志で続けているフランス原典の読書会は、7月から6冊目のマルセル・パニョル『子どもの頃の思い出』に取り組みます。おなじみの映画『プロヴァンスの城』の原作の抜粋で、比較的短く、平易ともいわれています。あなたも参加しませんか。

問い合わせは井土 ☎059-226-2766まで。